

だっこ

今生康宏

だつこ

「コー君！ コー君！」

「……どした？」

唐突に俺の幼馴染……にして彼女が、ばんざいの体勢でびこびこ両手を振ってきた。

思えばそう、さくらは昔から突飛な行動が多かつた。感性が人と違うというか、どこかかれでいるというか。つまりは天然というか。

それが人の迷惑にはなつていなかつたと思うが、とりあえず俺にとつては理解不能な行動が多く、まあその度になんとなく気持ちを汲み取つて理解し合えてきた自覚はある。ただ、今回ばかりはその行動の真意がわからなかつた。

とはいえる、俺たちはもうただの友達から、彼氏彼女の関係になつた訳だ。わからないと言つてもあんまりにしようもない。

「ああ」

とりあえず、俺も同じようにびこびこさせてみた。

「ふつ……あははっ！ コー君、なにそれー？」

いや、お前もすることですぐな。

さくらの真似をする俺がよっぽど滑稽だつたのか、さくらは腹を抱えて笑い出した。こいつ、ちよいちよい俺には遠慮ないからな。

「コー君、コー君」

そしてまた、例のびこびこ運動に戻る。

さくらは色々と油断が多いとはいえ、もういい歳だ。自分が“女”であるという自覚もあるし、俺をハラハラさせてくれる機会は減つていたが、今日のびこびこはなんというか……結構激しく、胸が揺れてるんだよな。子どもがやつてたら単純に可愛い行動だろうに、今のさくらがやると十二分にエロい。率直に言つて。

「あつ」

そして、ようやく気づけた。さくらは今、子どもじみたことをしているのだと。

「よい、しょつ……」

「ふわーっ、たかーい！」

脇の下に腕を潜り込ませ、さくらを持ち上げる。だつこという訳だ。胸はある癖にやたらとほつそいさくらは大した重さじやないから、今でもちよつと俺が力を込めればしつかり持ち上げられる。……しかし、今更だつこか。

「お前なあ、なんでつたつていきなり」

「えへへっ、これでコー君と同じ目の高さだねー。コー君、でつかいんだもん」

「お前がちっこいの」

「えへへー」

さくらはなぜか照れくさそうに笑つて。
それから……。

「んんつ!?」

「ちゅうつ……ちゅるつるううつ……ずつ、ちゅるつ……！あむちゅううつ……ちゅぱつ、
ちゅずうつ、ずるるうつ、ちゅるつ、ちゅううつ……」

頭の中が真つ白になつてしまつていた。

さくらは俺と見つめ合つた、いきなり頭突きのように額をくつつけて来ると、そのまま唇を重ねてきた。

当然のように舌が俺の口の中に入れられて……。

「んむうつ……むちゅうつ、ちゅつ、ちゅぱつ、ちゅれろつ……んちゅつ！ふあー、おいし
かつたー」

「ジュース飲む感覚で人の口を舐めてくな」

「コーラの味だー。ノンカロリー？」

「きつちりレビューもしていくな。その通りだけど」

なんというか、さくら特有の謎行動が彼女バージョンになつたことで、色々と危険度は上がつた気がする。

俺は思う。つい最近まで童貞だつた奴の弁だが、まあ一般論として聞いてほしい。

……恋人同士がそこまでピュアツピュアで、清いものだとはさすがに俺も思つてない。とはいへ、キスをする時はお互いが合意か、それに近いぐらいまで情感が高まつてからするもので、とりあえずだっこからの不意打ちでやることじやないだろう。俺はそう思う。そう断言していいと思う。

だが、さくらはそれをやる。平然と行動に移す。なぜか？さくらだからだ。

「なあ、さくら。こういうのはもつと雰囲気つていうか、せめて前置きをだな……」

「ちゃんと言つたよー？ コー君と同じ目の高さになれたつて」

「それは前置きつて言わないと。一般人のレベルでは。拳を振りかぶる予備動作の後、目からビームを出すぐらい、予備動作として機能してない詐欺モーションだからな？」

「えー、なにそれー」

「お前の行動が俺以外相手だつたら、クレームものだつたつてことだ」

「じゃあ、コー君だからいいよね！」

「……まあ、お前の訳わからなさを知つてるからな」

さくらはニコニコ笑つてゐる。全く邪氣のない、ただただ可愛らしい笑顔。……反則としか

言えない。

「私ねー、コー君とちゃんと目、あんまり合わせられてない気がしたの」

「まあ、身長違うからな」

「うん。コー君が私を見る時は、いつつも下を向いてて、私は上に向いてるの。ちゃんと見てるつもりだけど、楽にして見るのは違うでしょ?だから、だっこなら普通に見れるなーって思って」

「はあ、なるほど」

「でね。目がちゃんと合つたらね」

さくらは少しだけ、顔を赤くする。

「したくなっちゃった。キス」

「……なあ、さくら」

「うん?」

「俺もたつた今、お前としたくなつたんだけど、いいか?キス」

「いいよー。だっこしてー」

また手をびこびこさせて。

「仕方ないな。……よつ、と!」

「ふわー、たかいー」

「んつ……」

「ちゅうつ……ちゅぱちゅうつ……ちゆるじゅうつ……ずるちゅつ、ちゅぱつ……んまつ、
ちゅつ、ずつ、ずるうううつ……ふちゅるううつ……ちゆるちゅつ、ちゆれるううつ……
ずつ、ずずるうつ、れる、ぱちゅつ、ちゆるぱあつ……！」

さくらの舌使いは……俺が驚くほど激しく、情熱的に感じる。初めてした時からずつとそう
だ。

普段ほけ一つとしてるさくらがどうして、と毎度思う。でも、きっとそういうものなんだろ
う。

「ちゅばちゅうううつ……んるちゅつ、ちゆれるつ、ちゆるるるううつ……ずつ、ずるるつ、
ずるちゅつ、ちゆれぱうつ……んむちゅつ、ぢゅつ、ぱああつ……！ コー君、好きい……」

「俺もだよ、さくら」

さくらは人と感性が離れていて、独特で。実は人よりも動物に近いんじゃないだろうか、と
も思う。

俺だからさくらの言葉や行動をある程度は理解できるけど、他のやつとはそもそもいかない。……
だからきっと、自然と言葉よりも行動で気持ちを表そうとしている。

だから、さくらのキスはこんなにも情熱的で……好きっていう気持ちが伝わるんだろう。

「コー君、コー君」

また地上に下ろした直後、さくらが手をびっこさせてくる。

「……またか？」

「したいのー」

……これから先、キスの度にだっこしてたら、ジムに通うよりも腕の筋肉が付くだろうな、
なんて思つたりした。

だっこ

2021年 8月11日 初版

奥付

著者 今生康宏
URL <https://wedgewhite.com>
E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)